

関西帰国生親の会かけはし会報

Vol.49 関西帰国生親の会かけはし <http://www.ne.jp/asahi/kakehashi/kikoku/>

ようやく日本でも、コロナ以前の日常が少しずつ戻ってきました。大喜びでマスクをはずす子どもがいる反面、マスクを着けない生活に戸惑いを持つ子どももたくさんいるだろうと思います。子どもたちが今までとは違う状況に早く適応できるように、これからも親は温かく見守っていくことが必要ですね。

さて、近年、親が海外赴任に帯同する子どもたちが低年齢化しているをよく聞くようになりました。幼少期の海外生活であれば、学齢期になってからの成長や教育についての心配はないと考えがちですが、必ずしもそうとは言えない現状があります。そこで今号では、小さなお子さんを連れた海外赴任に不安を抱く方たちにお届けできればという思いから、「低年齢の帰国生」をテーマに取り上げました。長年にわたり小学校の帰国子女教育に携わってこられ、現在、海外子女教育振興財団で教育アドバイザーをされている中村昌子先生に、低年齢で帰国した子どもたちの学校での様子や、海外滞在中、そして帰国後に親が気をつけるべきこと等についての貴重なお話をお聞きました。また、実際に低年齢の子どもを帯同した経験を持つ保護者からの声も掲載しています。そして、レポートでは海外駐在員妻に「現在の海外生活と帰国への思い」についての意見を求めました。どれも参考になる内容となっておりますので、現在海外赴任中の方、これから海外生活を送られる方へのアドバイスとなれば幸いです。

かけはしでは今回、コロナ後初めて、対面インタビューを行うことができたことに喜びを感じております。これからあらためて人との繋がりを大切にして、少しでもみなさまのお役にたてますよう取り組んでまいります。

関西帰国生親の会かけはし



目次

* ご挨拶			1
* 特集 - 低年齢の帰国生 -			
「低年齢での帰国について」			
	公益財団法人 海外子女教育振興財団 教育アドバイザー 中村 昌子		2
「幼い子どもを海外に連れていってどうだった？」	かけはし会員 他 2 名		5
* かけはしレポート （第 27 回）「駐在員妻の海外生活の満足度と帰国への思い」			7
* 異文化でドッキリ！ ＜子どもの学校(赴任地)編＞			10
* 「長い海外生活を終えて、今、思うことあれこれ」	かけはし会員 K. G.		12
* 海外の学校を紹介します 「シンガポール日本人学校チャンギ校」		松田 麗夏	13
* 「関西帰国生親の会かけはし」と他の団体とのつながり・「レッツトーク 2023 春」実施報告			14
* 会員のつぶやき・編集後記			15
* 『帰国生への学校案内《関西》2023』・ご賛助くださっているみなさま			16

(敬称略)

「低年齢での帰国について」



公益財団法人 海外子女教育振興財団 事業部 教育振興チーム 教育アドバイザー 中村 昌子 先生

帰国生だけの特設学級(国際学級)を併設する東京学芸大学附属大泉小学校にて 35 年間勤務。その間、国際学級主任、担任を経験し、帰国生への相談・面接等も担当。2019 年に定年退職後は同校非常勤講師、東京学芸大学非常勤講師として勤務。2020 年 10 月より財団の教育相談員を兼務し、2022 年 4 月より財団の教育アドバイザーに専念。

ー 東京学芸大学附属大泉小学校の国際学級やり組について教えてください。

- ◆ 日本の小学校で初めての帰国子女教育学級として 1969 年に設置され、2019 年には開設 50 周年を迎えました。両親がともに日本人の場合は、日本人学校在籍経験や、出国前に 1 年以上国内の学校に通った経験があると受け入れ対象にはなりません。国際学級の帰国生の平均海外生活経験は 5～6 年。算数や国語では教科としての学習だけでなく、個々の進度に合わせた個別学習も行うことで、なるべく早く一般学級に混入できるようにサポートしています。国際学級の在籍期間は短くても 1 年、平均して 2 年ほどのお子さんが多く、学級での学習状況、個別学習の進度状況、本人の特徴などあらゆる角度から検討したうえで一般学級への交流時期を見定めています。中には卒業まで在籍するお子さんもいますし、ご兄弟が地元の学校に通っているなどご家庭の事情で公立学校に転出するケースもあります。

ー やり組は小学 3 年生からのようですが、より低年齢で帰国したときにはどうしたらよいのでしょうか。

- ◆ 大泉小の場合 1、2 年生の帰国生の受け入れはごく少数で、一般学級に混入します。これは、低学年のうちならば、日本の小学校で基礎的なことからしっかり学べば、学齢相応の日本の学習に適応できるということです。3 年生以上になると、学習内容も難しくなり、また母語の獲得期である 8 歳まで海外で生活したことで、母語の未発達、獲得の遅れが大きいと考えるからです。ですから、小学 1、2 年生、また幼稚園の間に帰国したおさんは、学校での学習をしっかり行えば小学校在学中に学年相当の力に追いつくことが可能です。個人差もありますが、できれば外国語の保持にあまり意識を向け過ぎないように気を付けてください。日本語の発達が遅れている分、取り戻しが必要なこの時期に、英語の学習に力を入れると子どもたちは混乱します。まずは母語の取り戻しと、小学校での学習に専念することをお勧めします。

ー 日本でも小学校から英語の授業が始まっていますが、帰国生が上手に英語の授業に溶け込めるように配慮されていたことは何かありますか。

- ◆ お友達も外国語が通じるし、先生たちも個別学習で丁寧に対応してくれるという国際学級には居心地の良さがありますが、いつかは大きな集団に戻るためのトレーニングも必要です。一般学級混入後の生活は、帰国生にとって不安が大きいものです。国際学級と一般学級では評価基準も違いますし、どうしても周りの子どもたちよりも学習の遅れが出てしまうことは否めません。ですから、英語の授業では、海外で身につけた英語を生かしネイティブの先生の手伝いや、他の子どもたちがわからないことを話してもらったり、皆の意見をまとめて代表で発表してもらうなどして、自信がもてるようにしていました。

ー たくさんの帰国生を教えたご経験の中で、印象に残っているエピソードがあれば教えてください。

- ◆ 以前は日本の生活習慣になじめず、特に給食に苦労する子どもが多くいました。泣きながら給食を食べていた子もいましたが、今では食生活が豊かになったからでしょうか、日本の給食に驚き、喜んで食べる

子どもが多くなったことは嬉しい変化です。最近は給食を楽しみに学校に来る子どもも増えていて、おかわりはいつもじゃんけんで奪い合いです。食べることに意欲があるということは、たくましさとか生活力にもつながります。

コミュニケーション力や発信力も以前に比べて上がっていて、自分をどんどんアピールできるようになっているのは海外で身につけた力なのではないかと思います。また、受け入れる側の子どもたちも変わってきていることがうかがえます。自分の意見をはっきり言う帰国生が一般学級でうまくやれているかどうか心配で、どう感じているのか一般学級の子どもたちに聞いたところ、グループ発表のときには一番先に意見を言ってくれるから話し合いが活発化する、と皆が頼りにしている側面があることを話してくれました。1980 年に新校舎が完成した際に、それまで離れていた国際学級と一般学級の距離が近くなりました。このことも、国際学級と一般学級の交流が深まるのに良い結果をもたらしたと言えます。

ー 財団の教育アドバイザーとして、どのようなお仕事をなさっているのでしょうか。

- ◆ 主な仕事は海外に赴任されるご家族、帰国されるご家族の個別相談とセミナーの講師です。日本の帰国生受け入れ校を訪問し、受け入れ方針や帰国生の活躍の状況をお伺いして、個別相談にも生かしています。セミナー講師については、財団が作成したビデオを企業に提供して研修に使っていただくこともありますし、企業内で講師をすることもあります。財団主催の赴任前セミナーはどなたでも申し込みが可能で、1 時間ほどで海外生活の概要についてご説明しています。

そのほかに、それぞれの教育アドバイザーの先生方のキャリアに合わせた仕事があり、私は帰国子女の受け入れを長くやっていた経験から、大泉小の国際学級で使用していた教材を、財団の通信教育の教材づくりに生かしていただくお手伝いをしています。

また、日本人学校の先生方への支援事業として、現地の先生方に日本の情報をお伝えする「グローバル教師塾」を始めました。コロナ禍で中止になっていた日本人学校訪問も今年から再開しました。巡回相談といって、日本人学校や補習校をアドバイザーがチームを組んで訪問し、現地で教育相談をするという事業も少しずつ再開されます。

ー 海外赴任に帯同する子どもの低年齢化が言われていますが、実際のところはいかがでしょう。

- ◆ 若い方の赴任が増えて幼児の帯同も増えていると思います。幼稚園や小学校の学校選択のご相談も増えていて、日系幼稚園もある大都市では、日系幼稚園、現地の幼稚園、インターの幼稚園の選択で迷われます。保護者の方はせっかく海外に行くのだから現地やインターの幼稚園でと思われる方が多いですが、財団のセミナーでは、母語の習得の大切さをお話ししています。2～8 歳は言葉の基礎が身につく一番大事な時期です。現地やインターの幼稚園に通った場合、小学校に入るところまでに帰国されれば学校の勉強の中で母語も挽回はできると思いますが、学齢相応の日本語力を取り戻すには時間がかかることを保護者の方にも理解しておいていただきたいです。それを踏まえて、海外でも保護者の方が、ある程度意識的に日本語を使う環境を整えることも大切です。国語の力とは漢字が書けるかどうかだけではなく、文章を読んで理解する力が最も大切です。「読書」だけは続けてください。教科書の音読でもいいです。そして、どんなことが書かれていたか、またわからない内容があったか、どんな感想をもったか等、家族でコミュニケーションをとる時間をもってください。

ー コロナ禍で相談の内容が変わったところはあるのでしょうか。

- ◆ 緊急帰国や、いつ帰国になるかわからないため、日本の受験に備えた相談が増えています。また、コロナ禍の影響で、精神的な不安を抱えているお子さんや保護者の方の相談も増えています。ロックダウンで全く外出ができず、子どもがずっと家でオンライン授業を受けていたことで親も子もストレスを抱えてし

まい、日本への緊急帰国でさらにストレスを重ねてしまったといったご相談がありました。このようなお子さんが少なからずいらっしゃるのだろうと推察されます。

ー 幼稚園に通う年齢で帰国するお子さんもいますが、どのような相談が多いでしょうか。また、どのようにアドバイスをなさっていますか。

◆ 「海外で身につけた英語をどう保持したらよいか」という相談はとても多いです。日本語の発達を学齢相応に取り戻すことを優先するようにお話しします。また、子どもは子どもの中で言語力を身につけるので、幼稚園や学校の集団生活の中で使う言葉が必ず優位になります。10 歳以上の子どもならば、日本語の基礎力があるので英語を第二言語として、自らの意思で学習し英語力を保持することは比較的容易です。しかしそれ以前のお子さんは日本語力を定着させることを第一に考えれば、当然英語は忘れてしまうと思います。これは仕方のないことです。但し、耳の記憶、発音などは機能として残るので、一度忘れてしまっても、年齢が上がって 4 年生以降で学び直しをすれば、短期間で英語力を取り戻すことは可能です。焦らずに、まずは日本語の獲得に専念しましょう。

「周りの子どもにいいじめられないか」「帰国子女の多い幼稚園はないか」といったご相談もよくありますが、今はグローバル化が進み、外国人の方が普通に日本の学校や幼稚園に入学、入園してくる時代です。特に小さいお子さんほど適応は早いので、はじめは少し不安はあっても、すぐに慣れるでしょう。まずはお母さんが周りのお母さんと早く仲良くなること、その中でお子さんの様子を話して、ご理解をいただくことが大切です。

ー 海外生活が長い帰国生や保護者の方へのアドバイスはありますか。

◆ 生活適応にかかる時間は全般的に短くなっている一方で、毎日宿題が出る、ノートをきちんととらなければいけないといった、日本型の学習への適応が困難なお子さんが目立つようになっていると感じます。親として、今、その子にとって一番必要なことは何なのかを見極める力が必要です。生活適応を第一に考え、塾や習い事などに忙しすぎて、学校で集中力がなくなってしまうような優先順位を見直す必要があるかもしれません。

ー 帰国生の強みはどのようなところにあると思われますか。

◆ 海外で様々な国の方と交流した経験、その中で身につけた多様な価値観は、世界的な社会問題等にも早くから目を向け、他人ごとではなく、自分ごととして考える力にもつながり、必ず将来生きてきます。また、積極的に自分の考えを発信する力、相手の考えについてきちんと意見できる力(クリティカルシンキング)も、帰国生が身につけた素晴らしい力です。周りに遠慮せず、どんどん発信してください。逆に「外国語が話せる」ということは、それほど大きな魅力にはなりません。海外に行かなくてもそのような人はたくさんいるからです。

ー 海外で学んでいる子どもたちや帰国生、保護者の方へのエールをお願いいたします。

◆ 海外に行ったときに体験した不安、また帰国したときに抱いた不安、それをご家族皆さんで乗り越えてきたことが何よりも素晴らしいことです。困難を乗り越える力こそ、どこでも求められる力です。そして多様な価値観、広い視野をもって生活してきたことを大きな自信にしてください。

ー お忙しいところ、貴重なお話をありがとうございました。

インタビューを終えて

その子にとって今一番必要なことは何なのかを見極める力を培うこと。また、「子どもに苦勞をかけさせないために」と考えるのではなく、「苦勞を乗り越えてきた力の素晴らしさに目を向ける」ことが大切だと話してくださる中村先生。改めて、親としてできることを考えるきっかけをいただいたインタビューでした。

幼い子どもを海外に連れて行ってどうだった？

幼い子どもを連れて海外転勤をすることになった保護者は、海外へ行く前、滞在中、そして帰国後に、どんなことを思ったり、どんなことを子どもにさせたりしたか、経験者に聞いてみました。滞在国、滞在時の子どもの年齢や性別もいろいろですが、海外での体験をそれぞれにつなげている親心がうかがえます。



アメリカ 男子 2～3 才・4～8 才 (2 回)

出国前

一度目は教会の保育室に連れて行っても喜んでいたので、二度目も全く不安がなかった。英語については自然と身につけばよいし、目や髪や肌の色、言葉が自分と違う人たちがいるということを知り、その人たちと仲良くできるといいなと思っていた。

滞在中

本音としてはできるだけ英語を習得してほしいと思っていた。本人はマイペースで、友だちとも仲良くして毎日楽しそうにしていたので安心していた。YMCA の Afterschool Class にも行き、朝 8 時に出て夕方 6 時に帰る生活でどっぷり英語に浸かり、家庭での兄弟の会話も英語でしゃべることが多かった。日本語は標準語の私と話をしていたので、関西弁は使えなくなった。年齢的に簡単な本だが日本語の本も英語の本もよく読んでいた。

帰国後

帰国後 2 年間程度、外国語保持教室や英会話教室などに週に 3～4 回通った。本人は最初英語に自信を持っていたが、後から帰国してくる子の英語のほうが上手だということがわかってからは英語に対する熱意が薄れてきて、中学受験塾にシフトした。中学、高校と英語の成績は良かったが、理系に進学し、留学もした。本人曰く、「英語は別に困らない。リスニングがいいのはアメリカにいたから」。幼少期の経験で得られたのはお子さま英語であったが、のちにプラスの影響があったならば親としてうれしい。

ベトナム 女子 4～8 才

出国前

日本の幼稚園へ通わせていなかったもので、突然英語の幼稚園(インター校)へ入れることが不安だった。日本語保持が心配だったので絵本をなるべくたくさん持っていこうと思った。

滞在中

環境変化のためか軽いチックが出た。これを見て(姑から言われていた)左利きを矯正するのをやめ、家ではなるべくのんびりできるように気を配った。外出しにくい環境だったが、一年中暑いので、運動のためアパートのプールでスイミングを習わせた。泳ぐのは今でも得意。日本語は、実家から月刊『こどものとも』を 2～3 か月分ずつ送ってもらった。また、インター校の 1 年生途中で日本人学校へ入学させたので、英語保持のため家庭教師を探した。インター校の先生が引き受けてくださり、読み書きを重点的に教えてもらえたのがよかった。

帰国後

近くで英語保持のできる教室を探したが、子どもに合うレベルの教室を見つけられず、とにかく読み書きだけでもと思って公文教室へ行かせた。



イギリス 女子 2～6 才

出国前

日本では保育園に預けて仕事をしていたのに、海外では 24 時間ずっと子どもと向き合わなくてはいけないことや親に助けをもらうこともできないので、子育てや教育に不安があった。

滞在中

日中子どもと 2 人で、孤独を感じることもあったが、公園に行ったり、現地の子育てサークルやリトミックに参加したりで、外に出たらとても温かく受け入れてもらえて、精神的に助けられた。一歩踏み出す勇氣は大事だと思う。



帰国後

外国語保持のための習い事をさせていたら、子どもは無理なく伸び伸び楽しんでいた。そのためか、早期に英検取得などができた。今でも英語を好きでいてくれるようでよかった。

インドネシア 姉 5～7 才 妹 2～4 才

出国前

現地の情報があまりなく、衛生面や医療制度、現地で流行っている病気などとても心配だった。子どもたちの教育については、帰国後に通う日本の学校のことを考え、日本語の教育に遅れが出たらどうしようかと不安になった。

滞在中

小さな子どもは熱を出したり、おなかをこわしたり病気になることが多いため、どうしても地元の病院にかかるが、言葉の問題もあり、どうしても信用できなかった。日本ならば、安心して受診できるのにといつも思っていた。



帰国後

日本語の遅れを取り戻すために、本の読み聞かせや国語の学習を子どもと一緒に取り組んだ。

ベトナム 女子 1～6 才

出国前

後ろを見ずにどんどん行ってしまうタイプだったので、空港で迷子にならないかが一番の心配事で、迷子防止リードを買った。



滞在中

お友だちと遊べるように、2 才から預かってくれる外国人用の保育園のようなところに入れ、4 才からインター校へ移した。どちらでも楽しく過ごしていた。とても手厚い保育で、最後までちゃんと話を聞いて理解しなくても、先生や助手さんたちに助けをもらっていたようで、しっかり話を聞くことができなくなっていたことに気づいたのは帰国後。

帰国後

親としては普通の子だと思っていたが、1 年生の担任に「ちょっと変わったお子さんですね」と言われてショックだった。でもどうすればいいのかわからず、そのままだった。話や文を理解することが苦手なのは後まで残り、文章題が苦手な小学校高学年以降の算数で苦労した。幼稚園レベルの英語では「聞く耳」が残ったくらいで、言葉としては中学以降の学習で身についたと思う。英語に対する苦手意識がなかったのはよかった。

かけはしレポート (第 27 回)

駐在員妻の海外生活の満足度と帰国への思い

・はじめに

夫の海外駐在が決まった時に、これからの生活を思い、戸惑いを感じなかった妻は皆無ではないだろうと思います。言葉、習慣、子どもの教育、住居、治安、周りの人との関係、不安要素は数限りなくあります。それでも新しい暮らしは待ってくれません。インターネットの情報や経験者のアドバイスがあっても、特に初めての海外生活や地域では、慣れるまでには時間がかかります。そして数年後、現地の生活に慣れた頃帰国辞令が出ます。今回は、海外在住の駐在員の妻に、海外生活で満足なこと、不満なこと、さらには帰国への思いについて聞いてみることにしました。個人や、地域による違いもありますが、それぞれの思いに共感できるところもあるかと思われます。今後海外生活を送る方々への参考となれば幸いです。

・アンケート調査について

- ① 目的：駐在員妻の現在の海外生活に対しての意識調査
- ② 実施期間：2023 年 2 月～3 月
- ③ 対象：海外在住の子どものいる駐在員の妻 29 人(ヨーロッパ、アメリカ、アジア計 6 か国)
- ④ 質問内容：1 現在の海外生活で満足していること
2 現在の海外生活で不満に思うこと
3 帰国について思うこと

*すべて複数回答可

・結果 (類似した回答についてはまとめている)

1 現在の海外生活で満足していること

【人間関係】 子どもの学校でいろいろな人と出会い、様々な経験ができる 色んな人がいるので言葉の理解がある だれとでも話せてすぐに友だちになれる 子どもを通じて人間関係の広がりがある 常識がある人が多い 人が優しい 日本人だけでなくいろいろな国籍の人と知り合いになれる 子どもに優しい
【時間と自由】 自分の時間が多く、やりたいことができる 家族の時間がゆったりとれる 子どもたちとの時間が取れる 時間にゆとりある生活が送れているが、反面ダレないようにも気をつけている 毎日好きなように生活できる 拘束感がなくて気楽 日本にいるよりのんびりした生活ができる 時間にアバウトな所があるので、ある意味時間に余裕が持てる みなさんわりと時間に余裕があるからランチとかお茶とかしやすい 良い意味で人の目を気にしなくなり、服装もラク 煩わしい日本での親戚付き合いをしないですむ
【自然・気候】 自然豊かな場所にすぐに行ける 一年中夏なので体調管理しやすい 自然が美しい 大自然の中でスローライフが送れる
【治安・生活】 治安がよい 安全で安心な生活ができること 交通の便がよい 交通が便利で狭いので、どこにも行きやすい 家が広い ゴミ捨てがラク エアコンの掃除をしてくれる 外食しやすい
【旅行・趣味】 旅行にたくさんいける 近隣国に気軽にでかけられる 行きたい観光地に気軽に行かれる 家にいる時間が長いので趣味の時間がもてる アンティーク、ヴィンテージコレクションが広げやすい
【その他】 交通費が日本に比べて安い LINE とかで日本の友人や親とつながっていられるのが安心 日本では手にはいらないような食品や現地のもが手にはいる 今しかできない経験ができる 日本人学校の教育レベルが日本の公立校よりよいとおもう

多国籍の人とのふれあいで異文化を学び、人間関係が広がっていくことに満足している人が多いようです。ビザの関係で専業主婦となる方がほとんどなので、さっさと家事や子どもの送り迎えをすませれば自由な時間が持てることもあるでしょう。あまり他人に干渉されることもなく「良い意味で人の目が気にならない」という気持ちもよくわかります。雄大な自然や過ごしやすい気候、地続きの隣国への旅行など、いろいろ楽しめることも多いです。その地でしかできない経験が海外生活を彩ることでしょう。

2 現在の海外生活で不満に思うこと

【医療関係】 病院への不満 医療が日本の感覚で受けられないこと 緊急の病院でうまく言葉が伝わらない 現地の病院の対応など医療面が不安 病院に行くのに通訳の人を頼まなくてはいけないのが負担
【物価】 日本食材、家賃、教育費が異常に高くどんどん高騰する 物価が高い 日本食材が高すぎる 光熱費が高すぎる 物価がものすごく高くなった
【食事・買い物】 食材が日本にかなわない 外食がまずい 魚の種類がすくなくすぎる ランチができるお店が限られている 食べ物がおいしくない ショッピングモールがどこも同じ 必要なものが売っていない
【気候・立地】 四季がないので、季節感が感じられない 冬が長くて雨が多い気候 雨が多く憂鬱になる 車がないと出かけられないのが不便 徒歩圏内に店がない 空港が遠い 公園が充実していない
【人間関係・コミュニケーション】 日本人コミュニティは狭いので、常に噂でもちきりで一度悪い噂が流れると自力で訂正できない 祖父母や日本の親戚との関係が薄くなる 気の合う友人がいない 至急の修理などうまく言葉が伝わらない 自分の英語力のなさにいらだつ 言いたいことを詳細に伝えることができないのがもどかしい
【その他】 電車が時間どおりに動かない 学校の対応が丁寧でなく、急に連絡がくるので慌てる 家に不具合があってもメンテナンスがすぐにこない うやむやにされる 郵便物が届かない 大家に連絡をしてもいろいろ言い訳をしてすぐに対応してもらえない 就労の制限があるので働けない 自分のキャリアがどうなるのか不安 美術展やコンサートなどの文化的娯楽で行きたいものがあまりない 100%な修理をやってくれない 時間がかかる 時間通り来ない 緊急時にすぐに帰国できない 楽しいことがひとつもない 携帯認証ができずに日本のネットバンクが使えない 日本と違って、便利なおかず素材や冷凍食品がないので毎日の弁当作りが苦痛

医療関係についての不満の言葉が一番多かったです。医療システムの違いや言葉の壁が不安になります。5 回も帝王切開で子どもを産んだ話とか日本では考えられないようなことも聞きます。海外生活においては健康であることが大事です。そのため、サポートしてもらえ信頼できる医師がうまく見つけられると海外生活の安心度が上がりますね。

昨今の物価高、特に外食の高さは日本以上だったりもします。食は大事だし、日本人だからやはり和食は口にしたいものですが、日本食材も高騰しています。検索して豆腐や納豆、お節料理など手にはいりにくいものを工夫して自作されている人もいます。食材の種類が限られるとお弁当作りも負担になりますよね。

地域によっては気候も大きく変わり、太陽のありがたみが身に染みる国もたくさんあります。冬の天気の悪さから気分が乗らない「欧州鬱」という言葉もあるくらいです。人間関係やコミュニケーションはどこにいても難しいものです。特に言葉が伝わらないともどかしい思いがつのりですが、言語翻訳ツールなどは助けになることでしょう。サービス業については、日本とは比較できないくらいルーズだったりします。こればかりは仕方のないことだとあきらめるしかありません。

3 帰国について思うこと

回答は概ね楽しいこと、心配なことの 2 つに分かれていました。

【楽しいなこと】 友だちに会える 親が年をとってきたので、近くにいられると安心
会いたい人に簡単に会える 同窓会に出席できる 気心のしれた友人たちと思いきりおしゃべりができる
新鮮でおいしいものが食べられる 美味しいものが食べられるし、元気になるから帰りたい
魚がたくさん食べられる 日本の外食は美味しいし安いから楽しみ
日本の季節や食材を経験できるのが楽しみ 歯医者、病院が安心 温泉めぐりをしたい
自分の身体のサイズにあった洋服や靴が買える コレクションの披露やネット販売
アルバイトでもいいから仕事をしたい 楽しい思い出をたくさん持って帰国したい
海外生活が生かせるようなボランティア活動を見つけられたらいいと思う
マイナンバーがないためにいろいろ不便なことが起こったので、取得したい

【不安なこと】 子どもの受験のサポートや子どもが学校に馴染めるか心配 日本の子どもの遊びについて
いけるか 子どもの進学についての不安 子どもの学力 子どもの教育が中途半端になるのが不安
子どもたちに欠けてしまった日本の常識が帰国後にどのような影響があるか心配
子どもが日本の学校に馴染めるか 子どもが勉強についていかれるか不安
日本の人付き合いがうまくいくか PTA やバザーなどが未知で不安 親や地域などしがらみが多そう
マスク生活に不安 生活の差 金銭面や生活面で感覚が違う 時間におわれる窮屈な生活が気になる
帰国後の就労 荷物が日本の自宅にはいるか心配 不便な夫の実家に住みたくない
日本への飛行時間が長すぎる 役所の手続きが FAX や紙、印鑑なのでめんどくさそう
ここで楽しい生活を送っているのに、逆ホームシックになりそうな気がする

帰国に関しての意見は楽しいことと不安なことともにありました。楽しいことでは、知己や親戚に簡単に会えることや、友人たちとゆっくりおしゃべりできること。また、日本の美味しいものや欲しいものが手軽に手にはいることへの期待、医療の安心感、自分のキャリアの継続希望といった意見がありました。不安なことでは一番多かったのは、子どもの学校への適応や進学についてでした。自分自身については、子どもの学校での付き合い、生活レベルや一日の生活リズムの変化も気になります。母国に帰るのですから、見知らぬ国に移動する赴任の時より気がラクに思われますが、楽しみ半分不安も大きいようです。

・まとめ

現在海外で生活している駐在員の妻たちに、生活について満足していること、不満なこと、また帰国についての思いを聞いてみました。手探りで始めた海外生活も慣れれば楽しいことが見つかるし、その地でしかない経験は貴重だと感じているようです。しかし、システムの違う医療の質や物価高、言葉の壁、食に対しては不満がありました。特にサービス業関連は日本とは雲泥の差。時間の感覚の違いや店員と客の対等な関係など、日本と同じような質を求めるのは難しいとのこと。文化が違うから仕方ないのですが。

帰国に関しては、母国である日本で得られる安心感がある反面、子どもの学校や進学、「外国帰り」となる自分が周りにうまく溶け込めるのかということについての不安が大きいようです。キャリアの継続についてや自由な時間が持てないのではないかと心配もありました。

ある回答者がこのように言っていました。「日本であろうと海外であろうと、新しい土地で生活に慣れるまでの苦労は同じ。海外では言葉がうまく伝わらないもどかしさもあるが、良きにしろ悪きにしろ日本では得難い経験をすることができる。子どもたちがこの地での生活を好きになるには、母親として、まず自分が楽しむ姿を見せないといけないと思う」。一家にとって、母親の役割は大事ですね。母親の前向きな姿勢や笑顔が子どもに大きな影響をあたえます。家族みんながその地で充実した生活ができるかどうかは母親次第ともいえるのではないのでしょうか。不満があっても下を向いてはいられません。しんどいことも笑って撥ね飛ばす、そんな力あふれるスーパーママたちに大いなるエールを送ります。がんばれ駐妻！

異文化でドッキリ！＜子どもの学校(赴任地)編＞

毎回驚きっぱいの異文化でどっきり。今回は赴任先で子どもが通った学校エピソードです。
郷に入っては郷に従え！とは言いますが、まさに身をもって学ぶ体験が盛りたくさんです。

子どもたちが通う現地校では、Moving Up Ceremony(卒業式)を前に、一人ひとり自分の等身大の人形を作ります。自分が身につけていた服を着せ、靴を履かせ、帽子を被せたりヘアアレンジもしたりします。人形たちは会場にずら一と並べられ、式を見守る観客となり、その後はそれぞれの家に持ち帰られます。最初のうちは家の中にいるのですが、だんだんと外に出されるようになって、ハロウィーンの頃にはちょうどいい具合のゾンビに変身しています。暗がりの中で見ると、わかっていてもぎょっします。(アメリカ)

娘の通っていたインターナショナルスクールにはインターナショナルデーという生徒の出身国の紹介を保護者がする日があったのですが、その本気度が凄い。広い体育館いっぱいに各国のブースが華やかに飾り付けられ、展示も本物の屋台を呼んでふるまったり、民族衣装が体験できたりと学校のイベントとは思えない豪華さ。これが全て保護者のボランティアで行われていることに驚きました。それもみんな楽しそう。(マレーシア)

名ばかりのインターナショナル幼稚園に3歳の子どもの数か月通わせた。日本人の先生が一人、英語が話せる先生が数人で、ドイツ語メインの幼稚園だった。自我の強いわが子とはとにかく問題児だったようで、お迎えに行くと「上着を着なかったので一人だけ外遊びはさせませんでした」。また別の日には、「食べたくないと言うので、ランチはなしでした」と言われ、私は泣いた。4月に日本人幼稚園へ入園。そこでのびのびと過ごすわが子を見て、私はまた泣けた。(ドイツ)

インターナショナルスクールのスポーツチーム(日本の部活に近い)の多くは近隣の学校と協力してトーナメントなどを行います。こ



の「近隣」が私の想像をはるかに超えたのがヨーロッパ。高校生の娘は週末の試合に向けて金曜日の午後の授業を

スキップしてバスでドイツのデュッセルドルフへ。同様に、違う種目の生徒たちはベルギーやスウェーデンへ。もちろん周辺国からオランダにも来ます。県をまたぐように国を越える彼らにびっくりです。(オランダ)

わが子たちが通った現地の子が大半を占めるインターナショナルの幼稚園。たまたまお昼前に幼稚園に行ったとき、今日のランチは何だろうとクラスを覗いてみた。一人ひとりの前に置かれたプレートによそわれていたのは、「白飯、もやし、きゅうり」、そしてわずかな具のスープ。もちろんジュースとフルーツつき。びっくりしたけど彼らにとっては美味しく楽しいランチだったらしい。(ベトナム)

中国で子どもを現地校に通わせていた友人の話。学校で集金する日は、子どもに持たせるお金(紙幣)にフルネームを書かせるんです。お札1枚1枚に。落とした時や盗難防止のためらしいのですが、集金額が多い時は疲れるわーと。そういえば中国では名前らしき漢字や電話番号らしき数字が書かれたお札をよく目にしました。メモ代わりに使っている？と思っていましたがそういう訳もあったのかと納得。今はキャッシュレス化が進んだので一昔前の懐かしいエピソードです。(中国)

オーストラリア系のインターナショナル校では教材にコアラやカンガルーだけではなく、「かものはし」も登場します。Platypus(かものはし)や Foal(仔馬)なんていう日本では普通に使わない言葉があり、宿題を手伝いながら学ばせていただきました。(ベトナム)

息子の通っていた小学校で、ランチボランティアをしていた時のこと。注文されたランチを配っていると、「いらな〜い」と持っていけない子や半分も食わずにゴミ箱に捨てる子がたくさん！残さず食べなさい、と言われる日本とのあまりの違いに驚きました。(アメリカ)

ある日、日本人学校から帰った娘が、学校で避難訓練があったと話しました。「火事の時？どうするの？」と尋ねると、「テロの時」と。大きな音がしたりしたら、建物の真ん中の窓の無い部屋に入る、誰か押し入ってきたら頭の上で手を組んで床に伏せる、という訓練をしたそうです。(サウジアラビア)

息子の通う現地校で、アートクラスのお手伝いボランティアをした。先生はまるで 101 匹わんちゃんのクルエラみたいなアーティスティックなおばあちゃん。とても子ども思いの先生だったが、ある時反抗的な態度の女の子の腕を引っ張ってしまったのが事件の始まり！その子は市長の娘で暴力を振るわれたと大騒ぎになり、翌日から先生は謹慎処分となった。授業は臨時の先生が担当したが、元先生が長年築いた部屋はどこに何が置いてあるのか誰にもわからず。私は元先生から頼まれ



て写真を撮っては送り、指示されるものを運び出しては届けて差し上げた。そのまま辞めれば退職金を全額貰えるという条件で、先生はあっさりと辞められ、今は自宅で楽しそうに子どもたちに教えている。(アメリカ)

わが子が通った現地校の Sports day(運動会)は、日本における行事の中でもメインイベントのそれとは全く違っていた。ほんの午後の数時間、子どもたちはスポーツを仲間と競い合いながら楽しみ、親は間近でのんびり応援するといったもので、私はすっかり拍子抜けした。もちろん、同じイギリスでも学校や年齢によって大差はある。そして数年後に帰国。小学校の運動会では、朝の陣取りの行列に始まり、親戚一同のお弁当作り諸々。前日からの準備で、競技が始まる前にすでにクタクタ。「あ〜イギリスの運動会で充分だったな〜」と懐かしむ自分がいた。(イギリス)

昼時のスーパーは近所のハイスクール生でにぎわっています。彼らは入り口で専用のカゴを受け取り、買い物が済んだら次の人にカゴを手渡し出ていきます。そして店の周辺や近所の公園、道端のベンチなど、あちこちでパンをかじりながら楽しく過ごし、いつの間にか学校に戻って行きます。なんとも自由な国です。(オランダ)



インターナショナル校の 1 年生になって算数で掛け算が始まったとき。「クッキーが 3 枚ずつのったお皿が 5 枚、クッキーは全部でいくつ？」という問題の答えを出す式を「 $5 \times 3 = 15$ 」と教わってきました。私が教わったのは「 $3 \times 5 = 15$ 」。発想の転換が必要でした…。(ベトナム)

いつもは普通の男女共学のインターナショナル校でしたが、政府のお役人が視察に来るとわかると急に、「女子はアバヤ(黒衣)を着て。教室の前半分に男子、後ろ半分に女子が座って」という指示が出たそうです。小学校から厳しく男女別学の現地の学校からすればありえない光景なんでしょうけれども。(サウジアラビア)

長い海外生活を終えて、今、思うことあれこれ

かけはし会員 K.G.



ベルギー オーイドンク城

この春、私は夫の海外転勤に伴って東南アジア、中米、ヨーロッパで 4 カ国、合わせて 27 年間にも及ぶ海外生活にピリオドを打って帰国しました。あらためて 27 年、という数字には自分でも驚きますが、どこに行っても気楽に流されるままに暮らしてきたように思います。そこかしこに果物の木があって、上から落ちてくる果物を食べていれば生きていけるからと、のんびりしている東南アジア。公園でテンガロンハットをかぶったおじさんが陽気に歌うと周りの人が踊りだす中

米。バカンスが生きがいで、仕事はバカンス費用を稼ぐための 1 つの手段に過ぎないというヨーロッパ。多様な文化や価値観の違う人々に触れて、人はみな、違っていい、こつこつ真面目に働くだけが人生ではないな、人の幸せってなんだろう、と、答えは出せないながらもいつも考えていました。

子育てのほぼすべては海外だったので、娘はのびのび育ったのではないかと思います。学校教育に関しては、小さい頃から調べたことをクラスでプレゼンテーションしていたので、自分の意見を堂々と言える習慣が付いたようです。記憶することが重要なのではなく、学んだことを自分の中で発展させ、自分の言葉で表現できること。それは、生きていく上ではとてもたいせつなことだと思います。また、ボランティアがカリキュラムに組み込まれているので、他人に対する思いやりの気持ちが自然に育つのではないかと感じました。そんな環境で育つ子どもたちなので、大人になってからのボランティアに対する垣根は低いのでしょう。教育とは、単なる詰め込みだけではなく、思考力を高めて生きる力を付けたり心を育てることかと思います。その点で娘には、広い視野を持って生きていく術を少しは持たせることができた



タイ 水上マーケット

かもしれません。しかし、最近では日本の教育もずいぶん変わってきているようで心強く思います。

海外生活の最後にヨーロッパで襲われたコロナ禍での奇妙な生活は、忘れられないできごととなりました。周りの日本人が、まだ感染がひどくなかった日本へ相次いで帰国していった後、ロックダウンとなり日本への飛行機が飛ばなくなった時の焦燥感が半端なかったこと。外出は食料品や薬局での買い物と、自宅から半径 2km 以内の散歩に制限され、家にこもっていると気が滅入るので、恐る恐る夫と散歩をして過ごした日々。病院の集中治療室が満床で受け入れが難しくなったため、これから命の選択が取られるようだ、と報道された時には「こんな若くもないアジア人は真っ先に切られてしまうかも。」と危機感を抱いたこと。命について真剣に考えさせられました。先の見えない中での不安、孤独感は忘れられません。あの時には長い海外生活で初めてホームシックになりました。

帰国して街を歩いていると、日本は流行を追っておしゃれをしている女性が多いことに気づかされます。長年仲良くしていたおしゃれなヨーロッパの年上の友人たちは、自分に似合う色を熟知していて、流行は求めずうまく服をコーディネートしていつも颯爽としていました。日本にいと特に、なにかと周りに合わせなくては、という気持ちになりますが、私も周りは気にせず自分に合った服、好きな服でいくつになってもかっこよく街を歩きたいものです。

鳥の囀りと共に目を覚ましてパンやケーキを焼いていた生活が懐かしく思い出されます。幸いにも家族が皆健康だったからこそできた長期間の海外生活でした。帰国後はなにかと気ぜわしい日本の日常に身を置けていますが、この生活にすんなり順応できる私は、やはり日本人なのでしょう。これからは日本に腰を落着けて、日本を再発見するためあちこち出かけることを、今から楽しみにしています。

海外の学校を紹介します



シンガポール日本人学校チャンギ校

松田 麗夏

私は現在 4 年生で、1 年生からシンガポールのチャンギ小学校に通っています。シンガポールには日本人小学校が 2 つあり、チャンギ小学校はシンガポール東側のチャンギ空港のすぐそばです。小学校の近くにはバス停があり市バスで通う子もありますが、ほとんどの子はスクールバスで登校します。私が乗るスクールバスは日本の観光バスに似た大型のもので、毎朝 6 時 50 分に出発します。季節によっては真っ暗で、バスの中で朝日を見ることもあります。

・チャンギ校の特徴について

- ① 週に 3 回レベル別に分かれて英語の授業があります。1 年生の頃は発音するのがすごく難しかったけど、今はだいぶ慣れてきました。私のクラスの英語の先生はとても明るい人で、優しくわかりやすく授業をしてくれて、私は英語の授業が大好きです。
- ② どの学年も週に 1 回イマージョン水泳の授業があります。1 年中プールの授業があり、毎週プールに入れるのは嬉しいです。
- ③ 週に 1 度イマージョン音楽の授業があります。この授業では英語の歌を歌ったり、リコーダーを吹く授業です。リコーダーでは「オーラリー」の歌のメロディを吹きました。

どの授業もシンガポール人の先生が教えてくれます。毎日英語に触れることができるのは、日本の学校とは違う所だと思います。

今年は学校行事もたくさんありました。主には民族衣しょうデー、運動会、音楽発表会などです。民族衣しょうデーとは、Chinese New Year/Hari Raya/Deepavali のシンガポールの祝日に合わせて、中国・インド・マレーシア・日本など好きな民族衣しょうで登校する日です。衣しょうを着る着ないは自由です。その日一日は 1 つの民族について、興味を持ち調べます。私は毎回いろいろな文化があって面白く、異文化に触れるのもいい勉強だなと思っています。今年の Chinese New Year の民族衣しょうデーの時は、2 年ぶりにライオン・ドラゴンダンス鑑しょうがありました。近くで見られてすごい力にびっくりしました。



ライオン・ドラゴンダンス

コロナが落ち着いてきたので、今年は現地校との交流もありました。チャンギ校に現地校の子が来てくれたので、私達は日本の食べ物について紹介しました。例えばもちやウナギなどです。現地校の同じ学年の子からはお手紙をもらえて、とても良い思い出になりました。そして 2 年ぶりに校外学習もありました。シンガポールをもっと知ろうという目的で、チャイナタウン、アラブストリート、リトルインディアへ班で分かれて出かけました。授業中に事前に文化や食べ物などいろいろ調べてから行きました。私はチャイナタウンへ行き、仏牙寺でお参りをしたり、お小づかいをもって中国風な物を買ったりしました。改めてシンガポールは多民族が集まる国で、色々な人種の人が住み、街のふんいきがちがう事を校外学習で感じました。このような校外学習ができることも、チャンギ校の良いところだと思います。

シンガポールに住みながら、日本語・英語で授業を受けれて、たくさんのことを経験できるチャンギ小学校。私は毎日楽しみに学校に行っています。

「関西帰国生親の会かけはし」と他の団体とのつながり

かけはしでは、他の団体と交流を持ち、会員の海外、帰国後の経験を外部の皆さまに役立てていただくこともあります。2022 年度も新型コロナウイルスの感染予防のために、中止となったイベントもありましたが、みなさまとの繋がりをたいせつに活動を続けています。

講師派遣

海外に赴任される先生方や企業の駐在員のご家族に向けて会員の経験をお伝えしています。

企業海外渡航前セミナー（オンライン開催 2 月 10 日）

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会セミナー（対面&オンライン同時開催 2 月 25 日）

渡航前個別相談会（対面&オンライン開催 通年）

会合参加

いろいろな団体の会合に参加することで多くの学びをいただいています。

海外子女教育振興財団 在外教育施設に関するシンポジウム（5 月 14 日）

海外子女教育振興財団 学校会員連絡協議会（オブザーバー参加 12 月 2 日）

寄稿・雑誌掲載

『帰国生への学校案内《関西》2023』の紹介や在外会員の現地のレポートを掲載しています。

『月刊海外子女教育』（公財）海外子女教育振興財団 2022 年 9 月号 学校案内の紹介記事掲載

『月刊グローバル経営』（一社）日本在外企業協会 2022 年 12 月号「ドイツの音楽文化を楽しむ」

『帰国便利帳』 Y's Publishing Co., Inc. 2022 年秋冬号、2023 年春夏号、Web 版に
学校案内の広告掲載



「レッツトーク 2023 春」実施報告

2023 年 3 月 9 日に春のレッツトークを大阪で開催しました。今回は海外子女教育振興財団のアドバイザーの先生、初めての方、いつも来てくださる方、帰国されたばかりの方、これから出国される方、元会員などバラエティゆたかなメンバーがご参加くださいました。

会員も交えていくつかのテーブルに分かれて、少人数のグループでおしゃべりをして、楽しいひと時を過ごすことができました。もちろん話題の中心は子どもの教育や将来のことでしたが、アドバイザーの先生方ご自身の経験談や動物を連れての赴任の経験など興味深い話は尽きることがありませんでした。時折聞こえる他のテーブルからの笑い声からもわかるように、どのグループもおおいに盛り上がっていました。

会員も楽しみにしているレッツトーク、次回も多くの方と語り合いたいと思います。ご参加くださいましたみなさま、ありがとうございました。またぜひ一緒におしゃべりいたしましょう。



2023 年 3 月 9 日 大阪にて開催

*写真はプライバシー保護のため画像処理をしています。



会員のつぶやき



-  暑い…とにかく暑い…体感温度 48 度ってどういうこと?! タイは 4~5 月が 1 年で最も暑い季節ですが、今年は異常だとか。甘くて美味しいマンゴー(1 個 100 円くらい。円安でお得感があまりない?)が食べられるのだけが救いです。(Ibu Anak Cinta)
-  四季があるという日本ですが、帰国後住んでいる家の周りは自然が少なく、季節を感じるのにはショッピングモールの飾り付けばかり。アメリカの家の庭の木々の葉の移ろいや鳥のさえずりが懐かしい。(新人)
-  連休の大渋滞の中、息子は東京から 14 時間半のロングドライブで帰宅。無事で何より。懲りただろうと「次は新幹線で帰りなよ!」と言うと、「も〜言わんとって〜、一日寝たら大丈夫。若いから」と。アホか! と呆れたが、次の瞬間、若いっていいなと感慨に浸る自分がいた。(ぴよキング)
-  明日の〇〇といえは何かとの問いに、大阪のオカンはみんな「明日のパン」と答えると聞いた。そんなことないわと思ひながらスーパーへ向かった私はパンを見た瞬間「明日のパン買っとかな」と呟いてしまった。故郷から 9000km 離れても私は大阪のオカンらしい。(あろま)
-  85 才の義母宅でタクシー会社に電話したら、苗字を告げたところで「数分で行きます」と言って切られた。義母は「毎日頼んでいるから」と涼しい顔。いやいや、だから 1 か月半前は徒歩 3 分のお墓まで歩いていったのに、今は支えがないと一人で歩けないのよ。(トホホの母)
-  帰国後の船便がまだ届かず、スーツケースの荷物で生活中。初めこそ、「こんなに何もなくてどうやって生活すればいいのだろう」と嫌になったが、慣れてきた今となつては、「この生活の方がスッキリしていいかも」と、荷物の船が沈んだりしないかしら、と考えている今日この頃。(kuppy)
-  テレビでみて、行ってみたかった長良川鵜飼を観覧してきました。日本で唯一皇室御用の鵜飼であり、鵜を操る 6 人の鵜匠は宮内庁職員なんだそう。知らなかったことばかりでいい勉強になりました。(マッキー)
-  チャールズ国王の戴冠式のパレードの後、兵隊たちが国王夫妻に向かって「Hip Hip Hooray!」を三唱。家族で「あ〜こんな時にも言うんだね」と、幼稚園時代のお誕生会でろうそくを消した時みんなで言っていたのを思い出しました。万歳という意味だそうで、どちらも三唱。(ジャカランタ)



編集後記

コロナが明けて京都の街は外国人観光客と修学旅行生で溢れ、有名観光地や評判のお店の前などあちこちに行列ができています。マスク着用率もずいぶん下がりました。そんな中、4 年ぶりに再開された「御蔭祭」を観てきました。葵祭の前祭ですがこちらも平城京の前から続いている由緒正しいお祭りです。行列が下鴨神社に到着した後に奉納される典雅な舞もすてきでした。学生時代から京都にいたくせに、帰国してやっと古都の良さを実感しています。みなさんもとまには京都や奈良で休日を過ごしてみてもいいでしょう。



会報 49 号、いかがでしたか。ご意見やご感想をぜひお聞かせください。

好評発売中!!

関西圏学校情報誌『帰国生への学校案内《関西》2023』

近畿 2 府 4 県の小・中・高 50 校と教育委員会を帰国生の保護者の目線で取材しました。在籍する帰国生や保護者の声も載せて詳しく紹介した学校案内です。



編集テーマ 「SDGs への取り組み」

《特集記事》かけはしセミナー要旨

「昔の帰国生・今の帰国生」 講師：大阪府立住吉高等学校首席(セミナー開催時) 清水寛史先生
特別リポート「SDGs-帰国生の体験」

《基礎知識》出国前に気をつけること、帰国への準備、海外/日本の学校への入学・編入学、他
大学入試基礎知識、英語保持教室・予備校情報、他

《取材記事》受験情報、特色、在籍帰国生・保護者の声、先生のお話、他

《コラム》「帰国生こぼれ話～帰国後泣き笑い集～」 「帰国後の勉強～困ったこと・うまくいったこと～」
「海外での家族の思い出〈食べ物編〉」 「異文化でドッキリ! 〈言い回し編〉」

A4 判・350 ページ 2,900 円(税込・送料別) ISBN 978-4-9908226-6-8

お申し込みは、かけはし HP ご購入フォームより。Amazon でもご購入いただけます。



笹井 さゆり

ご賛助くださっているみなさま (敬称略、順不同)

パナソニック株式会社 川崎重工業株式会社 樟蔭中学校・高等学校
啓明学院中学校・高等学校 高槻中学校・高等学校 関西大倉中学校・高等学校
早稲田摂陵中学校・高等学校 大阪国際中学校高等学校
樋口正和(小林聖心女子学院中学校・高等学校教頭) 辻本久夫(関西学院大学非常勤講師)
匿名(団体) 匿名(個人)

♪かけはし会員募集中♪

< 関西帰国生親の会かけはし編 >

Email: kakehashi@kansai.email.ne.jp URL: <http://www.ne.jp/asahi/kakehashi/kikoku/>

copyright © 2023 関西帰国生親の会かけはし All Rights Reserved

